

教育実習生に対する児童生徒の期待

吉田道雄*¹

The Analysys of Expectancy for Student Teachers by School Children

YOSHIDA, Michio

(Received October 29, 2010)

本稿では、教育実習後に教育実習生に対して得られた児童生徒の評価について分析する。教育実習は教員になるために欠くことのできない実践的体験である。熊本大学教育学部では、教育実習のために、基本的には学生が附属学校や地域の学校に出かける。附属学校は教育実習生の受け入れを本務の1つとしているが、協力校には協力を依頼することになる。その点、現場には負担を願うことになるが、この期間に学生がプロの雰囲気を感じ、実践力を身に付けることができるのである。その厳しさに教職に対する自信を失うものもいるが、さらに教師になる気持ちを強める学生も多い。大学としては、できるだけ教育実習の効果を上げる必要がある。

そのための方策の1つとして、教育実習生に対する児童生徒の期待を明らかにすることがある。それをもとに、教育実習生がさらに実践力を身に付ける教育ができると考えられる。

ここでは、こうした視点から教育実習生に対する児童生徒の期待を収集し、その分析をすすめる。

調査の実施

調査対象

熊本大学教育学部4年生が附属学校での教育実習を終えた後で、各学校の児童生徒に実習生に関する調査を実施した。その回答を整理して、教育実習の仕上げである「教育実習事後指導」で使うことにした(吉田道雄 2004a, 2004b, 2005, 吉田・吉山 2001, 2002)。

熊本大学の場合、附属小学校は各学年3学級あるから全体で18学級になる。附属中学校は1学年4クラスの3学年で12クラスである。

調査内容

附属小中学校の児童生徒全員を対象に、実習生が

「とてもよかったと思うこと」と「もう少しがんばってほしかったこと」について挙げるよう依頼した。実際の手続きとしては各人にラベルを2枚配り、各1枚に「よかった」、「もう少しがんばってほしかった」のそれぞれを記入する(写真1)。

回答数

1人で2枚のラベルを書くから、回答者が720人の小学校では1440件になる。同じ計算で中学生からは480人で960件の声が集まった。全員から収集すれば、内容が重複するものも少なくない。また、小学校低学年では「ありません」といった回答もある。しかし、いずれにしても、数値的には2400枚のデータが得られたことになる。

回答の活用

これを教育実習事後指導の場で実習生に提示し、それをグループで分析する時間を設定した(写真2)。附属学校での実習から2ヶ月ほど前に指導した児童生徒たちからの生データであるだけに、現実感がある。その中には実習生が感動するものもあるが、その一方で、気落ちするような厳しい指摘もある。また、「そんな見方をされていたのか」と驚く内容も少なくない。教育実習生の個人差はかなり大きい。基本的には訓練中の身であり未熟だということに

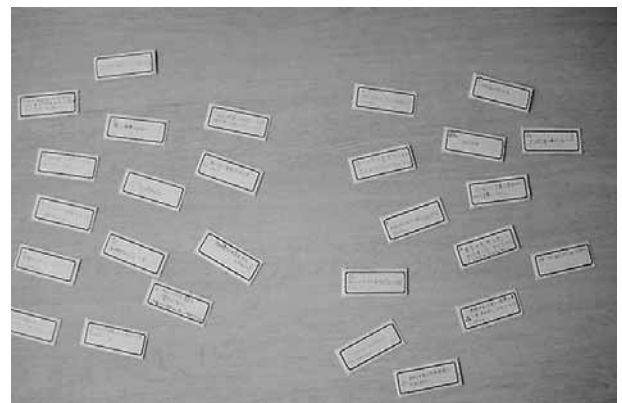


写真1 期待を記入するラベル

*¹ 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター：
860-0081 熊本市京町本丁5番12号

なっている。そうであるから教育実習をするのだが、児童生徒たちの声を聞いていると、その内容は必ずしも教育実習生に特有のものではないことがわかる。つまりは、一般の教師も耳を傾けるべき内容のものが少なくないのだ。それは教育実習生であるが故に目立っているだけで、現職の教師にとっても共通の課題として捉えるべきものだと考えられる。さらに視野を拡大すれば、一般社会におけるリーダーシップとも共通性がある。筆者は、学校の教室はリーダーシップの実験室だと強調してきた。子どもたちの反応は、大人の世界に比べると利害関係に左右される部分が少ない。もちろん、それがまったくないとは言えないにしても、きわめて純粋な見方をするものだ。そうだからこそ、教師に対する子どもの評価は厳しくなる。その一方で、子どもの期待に応えようと努力すれば、それはそれで正当な評価と反応をするものである。

本研究ではそうした児童生徒の期待を分析し、教育実習生のみならず、教師も含めて教育する側が留意すべき点を整理していく。それによって教師の児童生徒に対する行動のあり方について実践的なヒントが得られると考える。

なお、ここでは「とてもよかったと思うこと」と「もう少しがんばってほしかったこと」のうち、相対的には否定的な意味合いを含んでいる後者のみを分析の対象にする。また、その学年も中学1年生に限定する。あえて否定的なものに焦点を当てるのは、そうした課題を克服することが、そのまま教育実習の効果にも繋がると思われるからである。また中学1年生を選択したのは、そもそも延べ2400もの期待項目を一時に取り扱うことが困難であるため、人に関する評価能力がある程度確立していると思われる学年に焦点を当てたためである。

1) 声が聞き取りにくいところがあった。ちょっと



写真2 教育実習事後指導

間があったりして、授業がスムーズに進まなかった

2) 授業に集中させないといけない。声をもう少し大きくした方がいい

「声」は授業の前提になる基本要素である。教える内容がどんなに充実していても子どもたちに声が届かなければ意味がない。ただし、声量は個人的な体質もあるが、同時に心理的な影響も受ける。自分が伝えようとしている内容について自信がなければ、本人にもわかるほど声は低くなる。言いにくいことを言うときも歯切れが悪くなり音量も落ちる。いわゆる「尻切れトンボ、状態になるのだ。子どものころ、いたずらして大人から叱られる。その言い訳をボソボソと言っていると、「蚊の泣くような声で言うな」と大声で怒鳴られたりした。「聞こえるように話す。のはリーダーシップの発揮にとって最低の条件である。

教師に限らず、「聞こえるように話す。ことはコミュニケーションの基本的条件である。日本語は動詞が目的語の後ろについてくるから、肯定や否定が最後までわからない。また末尾に「か、を付けて問いかけることがある。文の頭を聞いただけでは肯定なのか疑問なのかも判断できないことも多い。したがって、話すときは語尾までしっかり発音する必要がある。「声が聞こえない」と書いた後で、中学1年生は教育実習生に対して「ちょっと間があって、授業がスムーズに進まなかった」と付け加えていた。この年齢ですでに「間、ということばを使っているのが興味深い。一般的には、適切な「間、を取ることは話す技術でもある。しかし、「間延びする、とも言うように、この生徒の場合は流れがよくなかったことを指摘しているのである。だからこの「間、は会話のアクセントとしてのそれではなく、ただ「行き詰まった、ことを意味していると思われる。「引っかけり、引っかけり、でスムーズな進行ができなかったのだ。これは「聞こえる声で言えない、ことの他に、指導内容に「自信、がなかったためかもしれない。

3) 授業中に焦っているところがちらほら見えたので、普通の顔でやって欲しい

授業がスムーズに進まないことについての評価である。第三者が聞くと苦笑してしまうような指摘だが、多くの教育実習生が体験していることだろう。教師や同じ実習生仲間の前で授業をするのだから、順調にいつているときでも「普通の顔、をするのはむずかしい。そんな中で、時間が迫ってきたり、生徒が予想したとおりに反応してくれなかったりすれば焦るのは当然である。それを避けるためにはでき

るだけ準備をしておくしかないが、それでも予測不能なことは起きる。`言葉につまらないで堂々としてほしい。も同種の要望だが、まさに教育実習生であるが故に、こうした状態に陥ることもあり得るのだ。それを改善しながら授業の仕方を身につけていくのが教育実習でもある。

4) 授業を進めるスピードを調節してほしい。授業内容をすばやくまとめ次の内容にいてほしい

授業の進め方についての希望である。おそらく時間調整がうまくいかず、生徒側からすれば、もっと先に進めると思ったのだろう。今回、回答を寄せた学校の場合1学級の生徒数は40名だった。教育実習生としては、全体が理解できるようにと念を入れて授業を展開したのかもしれない。あるいは、1つの事項について、自分が持っている情報をできる限り提供したいと考えたということもあるだろう。事前の指導案では十分な工夫をし、時間的にもそれなりの納得はしていたかもしれないが、現実はなかなか予定通りにいかないものである。この点は、やはり経験を積んでいくしかないところもある。それでも時間の配分やスピードが満足できるころまで達するのは、プロの教師になってからも容易なことではない。

5) もう少し授業をゆっくりしてほしい

`スピードアップ、を求める意見がある一方で、`ゆっくり、という声もあるわけだ。もちろん同じ教育実習生に対する期待だとは考えられないが、この場合は、時間内にすべてを出し切ろうという気持ちが行動に出てしまったのだろう。

6) もう少し授業を盛り上げてほしい

まじめに淡々と授業をしていけば児童生徒の満足度が高くなるかといえば、そうもいかない。この指摘は、伝える内容そのものやスピードの問題ではない。おそらく生徒の目から見て`楽しい、雰囲気、授業を期待しているのだろう。それは当然の期待ではあるが、そのためには教育実習生に心の余裕が必要になる。これもまた実習生にとってはきわめてむずかしい課題に違いない。しかし、それも時間が経過していくうちに力がついてくるものだろう。こうしたことを考えると、教育実習の期間についてもある程度の時間がほしくなる。現時点では、大学の低学年から現実の学校を知ることを重視して、教育実習が分散化する傾向がある。こうした課題については、今後さらに検討が必要である。そもそも現職教師ですら、対人関係やコミュニケーションのスキルに困難を抱える時代である。伝えるべき内容に関する学習も必要だが、人と関わる態度や行動は、教育実習で体験的に身につけてほしい。

7) 授業中の私語を注意しなかった

8) みんなが騒いでいるのに注意しなかった

教師にとって、`優しさ、と`厳しさ、は車の両輪にあたる。一般的に人に対して厳しく接するのはむずかしい。それが教育実習生となるとさらに困難を感じるだろう。しかも、教育実習生としては短期間の間にマイナスの関係ができてしまうことを恐れる。最初から最後まで`優しい先生、で通したくなるのである。もちろん重箱の隅をつつくようなしかり方は避けなければならない。しかし、`叱るべきは叱る、という基本姿勢を守ること教育実習の中で学ぶべきスキルだと考える必要がある。

9) 準備していた道具の字が間違っていた。

教師としては誤字は極力避けなければならない。誰も完璧とまではいかないが、準備物の場合は細大漏らさずチェックしておくことが基本である。それと同時に`誤字だ、という指摘を授業時間中に受けるような関係作りも重要なポイントになる。児童生徒が教師の小さなエラーについて、抵抗を感じることなく伝えることができる対人関係ができていれば、教師自身の行動変容にも役立つことになる。そうした関係を教育実習生が期間中に構築することはむずかしいところもある。しかし、現実の実習を観察していると、この点には個人差があって、スタートして間もないうちにそれなりの対人関係ができあがっているケースもある。こうした関係作りのために、教育実習以前に一定のトレーニングをしておくことも有効だと思われる。

10) 教える側なのに教えられている（間違いを指摘されている）ことがあった。

これも`間違い、に関わるものだが、こうした声が出てくるのは、児童生徒との`対人関係、ができあがっていないことの表れだろう。教育実習生があきらかに`教える側、と認知されていることもわかる。当然ではあるが、教育実習生にもそれ相応の責任が要求されているのである。

11) 授業の時間が長引くことがあった。

12) 授業が時間内に終わらず、中途半端。

時間管理については現職の教師に対しても児童生徒から不満が出されることが少なくない。人間は時間を情緒で感じる。興味のあることをしているときは時間の経過が速く感じられるし、そうでない場合は気が遠くなるほど長いと思う。授業にしても、チャイムが鳴ったあとも続けていると、授業全体の評価が低くなる。本来は時間内に終わることを前提にしていたはずだが、ついこうした状況が生まれることもある。これも広い意味での準備不足に含まれる。

13) 授業中に何度も言い直しがあり、どれが本当かわからない。

基本的には準備不足のためだろうが、教育実習生であることを考えると、間違いをすること自身は避けられない。ただ、`何度も、と指摘される点については大いに考える必要がある。そして、その結果として`どれが本当かわからない、ということになると、そうした状況を軽く考えるわけにはいかなくなる。

14) 字がきたない。

単刀直入だが、一部の教育実習生にとっては厳しい指摘である。コンピュータを使ったプレゼンテーションが増えてきたとはいうものの、板書そのものの機会はなくなっていない。`字は体を表す、ではないが、板書の文字も丁寧さは必要だろう。

15) 黒板の字が見えにくかった

板書の字がきれいであれば児童生徒の評価も高くなるが、それが見えにくいほど小さいと、こうした批判も生まれる。教師にとって板書の技術を向上するために努力する必要がある。授業に関わる情報を過不足なく書いていても、それが読めなければ意味がない。

16) 板書した後に黒板の前に立たれて見えないことがあった。

これも板書の技術の中に含まれるだろう。体験したものでないと気づかないようなコメントである。こうしたときに児童生徒から指摘されるような関係をつくっておけば、その場で問題は解決することになる。

17) ワークシートばかり使っていたので、黒板に何も書いておらず、ルーズリーフの出番がなかった

教育実習生としてはワークシートに時間をかけて準備したと思われる。しかし、それだけに集中して頼ったために、こうした声が出てきたのだろう。プレゼンテーションソフトも使い勝手がよくなり、結果としてそれに頼ることも多くなった。しかし、今日においても生身の教師が板書していくことも、授業の中で重要な役割を果たすものである。完成度の高いものであっても、プレゼンテーションソフトで作成したものは児童生徒側から見れば受け身的にならざるをえない。これに対してノートに書き込んでいく作業は、それだけで能動的な行為であり、授業の流れの中で適度の緊張感をもたらすことになる。

18) 実際の映像を見るときに映像が小さかった。

コンピュータを含めて、スクリーンに映写する機器を使う場合には、映像や文字の大きさにも注意を払う必要がある。とくにプレゼンテーションソフト

のスライド1枚に文字情報を書き込みすぎると、見にくだけでなく、その内容を転記しようとする児童生徒がついていけないといった問題も起きる。

19) 髪型をきちんとしていない先生がいた

教育実習に際しては`常識的な、服装をし、髪型にも配慮することは基本的な常識である。とくに子どもたちは、こうした点について敏感に反応する。それによって実習の効果が減衰するようなことは避けなければならない

20) 授業で質問したがそれに対する答がよくわからなかった

質問に対して納得できる答をすることが理想だが、教育実習生にとってはそれほど容易ではないと思われる。十分な回答がむずかしいと判断したときは、まずは`わからない、ことを認めておくべきだろう。そして授業後に正解をチェックし、改めて機会をつくってそれを伝えればいい。

21) お弁当で一言もしゃべらない先生がいた

授業だけが教育ではない。昼食時間などは、児童生徒との対人関係を築き上げるチャンスでもある。そこで良好な関係ができれば、授業においても望ましい効果を期待することができる。問題があれば、それを率直に指摘するといった反応も出てきやすくなる。

22) 挨拶をしても返事をかえしてこなかった

回答には`一部の先生、という但し書きがついているが、挨拶は教育実習生側からするくらいでなければ、児童生徒との関係づくりはできない。こうした点は、改めて事前に指導すべきものでもないだろう。いわば常識のレベルなのである。

23) まわりくどい言い方をするときがあった。

自分の伝えたいことをストレートに表現できないために、児童生徒から見るとくどくなってしまうということだろうか。これらも基本的には準備を十分しておけばある程度は克服できるだろう。しかし、経験の浅い教育実習生であれば、多少のくどさが出ててもやむを得ないところもある。

引用文献

吉田道雄 (2004a). 教育実習事後指導に対する参加者の評価
 (1) -自由記述によるグループ・ワークの効果分析-
 熊本大学教育実践研究, 21, 103-112.
 吉田道雄 (2004b). 教育実習事後指導に対する参加者の評価
 (2) -自由記述によるグループ・ワークの効果分析-
 熊本大学教育学部紀要 (人文科学), 53, 65-74.
 吉田道雄 (2005). 教育実習事後指導に対する参加者の評価
 (3) -自由記述によるグループ・ワークの効果分析-.

熊本大学教育実践研究, 22, 91-99.
吉田道雄・吉山尚裕 (2001). グループ・ワークを用いた教育
実習事後指導プログラムの開発. 熊本大学教育実践研
究, 18, 7-14.

吉田道雄・吉山尚裕 (2002). グループ・ワークによる教育実
習事後指導プログラムの開発. -実習生は, 子どもの
声をどう受けとめたのか? -. 熊本大学教育実践研究,
19, 133-143.